

平成22年5月17日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520156

研究課題名（和文）近世冷泉派歌壇の伝存資料についての研究

研究課題名（英文）Research on Primary Sources of the World of Reizei waka Poets

研究代表者

久保田 啓一（KUBOTA KEIICHI）

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80186452

研究成果の概要（和文）：冷泉家の歌学資料や添削資料の調査、江戸冷泉派の重鎮成島信遍の伝記研究、冷泉派歌人萩原宗固や冷泉派の周辺に位置する幕臣大田南畝の著作研究、上田秋成の和歌や懐徳堂の儒者の和文の注釈研究などに継続して従事した他、大和郡山の柳沢家、長門萩の毛利家などで一次資料の収集を行い、冷泉家の大名歌人指導が多面性を持つことを明らかにした。冷泉家と日野家の競合、懐徳堂の儒学と和学の関係など、課題は多く残されている。

研究成果の概要（英文）：We were engaged on research in sources of Reizei waka poetry, which told us how to write and castigate waka poetry, chronological records of Narushima Nobuyuki's career, books by Hagiwara Soko and Ota Nanpo, and Notes on waka poetry of Ueda Akinari and classical Japanese of Confucians belonging to Kaitokudo.

Also we collected primary sources of Japanese feudal lords, for example, the Yanagisawa family and the Mouri family, and explained various instructions of Reizei family.

In future we will solve other problems: competition between Reizei family and Hino family, and the relationship between the study of classical Japanese and Chinese for Confucians.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世、冷泉家、和歌、和文、懐徳堂、上田秋成

1. 研究開始当初の背景

享保から寛政にかけての所謂近世中期の宮廷歌壇において、江戸幕府との交誼を後ろ盾とした冷泉家が中心的地位を占めたことは、筆者が著書『近世冷泉派歌壇の研究』で

明らかとしたが、冷泉派歌壇がどれくらいの規模を持ち、具体的にどのような活動を行ったかについては、江戸冷泉派に関する筆者の言及以外にはまとまった成果に乏しく、何よりも全国各地に伝存する資料の概略をつか

むことさえろくに行われていないのが実情であった。本研究を出発点として、冷泉派の和歌・和文に関する資料の伝存状況を探り、そこから冷泉派歌壇がどのような特質を持ち、なぜ近世中期随一の歌壇を構築するに至ったのかを明らかにしたいとの思いがあった。また、冷泉家に歌を学んだとされる上田秋成や、為村と交渉のあった加藤景範ら大坂懐徳堂の人々との実際の関係はどのようなものであったのかを明らかにしなくては、上方の学芸の肝心な部分が不明のままとなるという問題もあった。和歌を久保田、和文を山本で分担しつつ、大まかな見通しをまずは立てるつもりで研究を開始した。

2. 研究の目的

和歌に関しては、近世冷泉派歌壇の本拠である上方と、冷泉家の最大の庇護者である幕府の所在地江戸を調査の中心に置き、特に身分階層の点で冷泉門の中核に位置した幕臣と大名の資料を重点的に調査することを目的とした。

和文においては、文芸活動において和歌を重要視していた上田秋成の和歌と、冷泉一門の周辺に位置した懐徳堂の儒学者の和歌・和文の考察を通して、秋成研究において必ずしも主要部分を占めていない和歌研究の基本的な立場の確立と、懐徳堂の儒者にとっての和学がどのような意味を持ったかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究代表者の久保田、研究分担者の山本それぞれに具体的に説明する。

久保田

(1) 研究資料の収集

全国各地の図書館・大学の蔵書目録類を購入し、冷泉派門人の蔵書や資料を保有する文庫に見当をつけた上で、調査収集の可能な機関から順次開始した。その際には、冷泉家当主と門人との間で交わされた書簡や詠草、短冊のような一次資料の有無が、大きな目安となった。冷泉家関連資料のまとまった収集対象としては、国文学研究資料館、宮内庁書陵部、国立国会図書館、国立公文書館内閣文庫、静嘉堂文庫などが主な機関である。特に国文学研究資料館所蔵「冷泉為村卿詠作類聚」は、為村の和歌や著述を、可能な限り収集しようと努めた門人の手になるものと推測され、いまだに集成されることのない、歴大な為村の著作の一応の集成として高い価値を有する。また、有力門人である特定の大家の一次資料を有する大和郡山藩柳沢家の柳沢文庫、長門萩藩毛利家の毛利博物館などは、研究の発展を見る上でも誠に有意義な、資料の宝庫である。

(2) 研究資料の解読と整理

本研究で収集した資料のリストを、順次作成しつつ解読を進めた。ただし、研究成果として取りまとめて発表するには至らず、あくまでも手元の内部資料として留めている。なお、本研究に入る前からすでに収集していた関連資料も多く、それらの解読と入力も研究の柱となった。特に信濃岩村田藩内藤家の経済を支えた佐久赤岩の池田家の伝来資料は、近世中期の豪農が、冷泉為村を始めとする当時の堂上歌人を対象に、どのように勸進和歌を行ったかを明らかとする、短冊収集過程が逐一記録された書簡を多く有するため、宮廷歌壇の構造を究明する上で非常に役に立つ。補助者による協力を得て、鋭意翻字入力に励んだ。

(3) 成島信遍、萩原宗固、大田南畝などの伝記・著作研究

歌壇史は、あくまでも個人個人の活動を精密に再現しなければ構築できない。種々の機会に研究を開始した人物の伝記・著作研究を継続させるのも、本研究の重要な要素となる。

山本

(4) 上田秋成が『源氏物語』各巻に寄せた和歌についての注釈作業

秋成和歌の注釈は、岩波書店の新日本古典文学大系『近世歌文集 下』に『藤篋冊子』全巻が収録されて著しく進展したが、その内容は、必ずしも秋成の表現意識を十分に汲み上げたものとなっておらず、再考の余地が大いにある。秋成の他の著作を利用しつつ、秋成に即して解釈を下した。

(5) 懐徳堂の儒学者の和歌・和文についての考察

中井履軒、三宅石庵、中井齋庵らの和文に精密な注釈を施しつつ読解し、同時代の歌人や文人との関わりを念頭に入れながら、そこに込められた彼らの思想、価値観、表現方法などを明らかにするよう努めた。

4. 研究成果

(1) 近世和文の注釈

久保田は大田南畝編集の和文集『ひとと草』の詳細な注釈を継続して行い、南畝の子息俣（通称定吉）の「七日」、南畝の親戚と見られる杉田信義の「山門びらき」、南畝とも交渉のあった幕臣歌人中神守節の「積奠」、そして南畝自身の「臥竜梅」の都合4編を扱った。〔雑誌論文〕の(3)、(11)、(16)がそれに該当する。『ひとと草』は従来影印と活字が公になっているに過ぎず、久保田が研究室の大学院生を指導しつつ注釈に取り組ませ、その成果に基づいて成稿化して初めて本格的な読解の対象となったものである。南畝の周辺には冷泉家に和歌を学んだ武家歌人が多く、彼らの習作ともいえる和文集

が、寛政末頃の江戸の知識人の雅俗に渡る表現意識を自ずと物語るものとなっていることは、詳細な注釈を施して初めて実感できる。またその注釈は、単なる辞書的な語釈のレベルに留まるものではなく、それぞれの執筆者達が何を参照し、何に啓発を受け、何を手本としたかを出来る限り再現できるように努めた。この作業を通して、南畝とその周辺の武家歌人や文人達の表現の襞に分け入ることがある程度可能となり、表現論の実践に多くの示唆が与えられたものと自負する。南畝に関心を持つ研究者の評価は高い。

(2) 上田秋成和歌の注釈

山本が勤務先の藤女子大学の学生を指導して試みた注釈の成果である。〔雑誌論文〕の(1)、(5)、(9)が該当する。秋成が自らの文学活動の中心に和歌和文集『藤篋冊子』を置いていたことは、近年の研究で認められつつあるが、その表現の佶屈が十分な解説を阻んできた面は否めない。その点で新日本古典文学大系『近世歌文集 下』によってその全文に注釈が施された意義は計り知れないが、その注釈には多くの問題があり、そのまま受け取るわけにはいかない。その注釈の問題は、秋成の用例から帰納して語義用法を確定するという方法が不十分であることに由来すると見られ、ようやく完結に近づいた『上田秋成全集』について用例を注意深く収集するという地道な作業によって解決すると思われる。山本はその方法で源氏物語和歌五十四首を注釈するよう指導し、自らの手で成稿化した。秋成の和歌表現のどこが特異であるのかは、古典和歌・物語の受容の内実、同時代の和歌との比較を通して初めて明らかになるとの信念のもと、周到な解釈を展開したものである。今後の秋成和歌研究の指針を示した業績である。

(3) 成島信遍の伝記研究

久保田が本研究開始以前から取り組むものの一環として発表した。〔雑誌論文〕の(2)、(10)(15)が該当し、これらに加えて成島信遍を江戸文壇にどう位置づけるかを論じた(8)も関連する業績として掲げる。信遍が享保から宝暦にかけての幕臣文化圏の中核に位置したことはすでに定説となっているが、「年譜稿」として可能な限り詳細に信遍の生涯を具体的に跡づけることにより、信遍を中心とした交友関係がそのまま幕臣文化圏の内実として把握できると考え、継続的に執筆している。本研究で扱ったのは元文2年前後の時期で、飛鳥山碑文の撰文と御同朋格奥務への昇任という、信遍の生涯の中でも最も晴れがましい事績を含む。それ故に検討すべき事績は多く、しかもそのいっぺんが丁寧な検討を要する事項ばかりであったので、進捗の度合いはわずかであった。51歳以降の22年間を残して続稿にどれほど

の紙幅を必要とするかは未定であるが、「年譜稿」完成の暁には近世中期江戸幕臣文壇の見取り図が非常に明確になるであろうとの期待が多く寄せられている。

(4) 大田南畝・萩原宗固の著作研究

〔雑誌論文〕の(6)と(13)が該当する。(6)は南畝が明代の日本研究の書『日本風土記』をどのように読み、自分の著述にどのように生かしたかを究明したものである。和歌とは直接関連を有する成果ではないが、この検討を通して、松平定信の登場以後の幕臣に共通してみられる一種のナショナリズムが見出されることを確認できたのは収穫といえる。(13)は、幕臣萩原宗固が南畝達の詠じた狂歌合に判を下したと従来説明されてきた「明和十五番狂歌合」が、実は狂歌合ではなく、点取和歌の垂流としての点取狂歌であることを確定させたものである。内容の十分な検討を経ずに文学史上に位置づけられてきた資料を改めて見直す必要性を提起した成果として注目された。

(5) 懐徳堂の儒者による和文の意義の検討

山本が本研究を契機として秋成研究から大きく展開を図ったという点で、誠に意義深い成果である。(4)、(7)、(12)、(14)が該当する。五井蘭洲、三宅石庵、中井履軒、中井齋庵らの懐徳堂の儒者、そして彼らの周辺に位置した上田秋成を、別個の存在としてではなく、和文に率直な思いを託した共通の文人として包括的に扱うことによって、山本は儒者の和文という特異な世界を探る端緒を手に入れたとあってよい。

(6) 今後の展望

近世冷泉派の和歌・和文の伝存資料の研究は、まだほんの入口にさしかかった段階である。未調査の図書館・文庫を数多く残すことになったし、冷泉家と日野家の門人獲得競争が具体的にどのように行われたのかという重大な課題も残った。幸いにして久保田は平成22年度から基盤研究(C)「近世堂上派歌人の宗匠選択についての研究」が採択され、引き続き調査を実施することが可能となった。本研究での成果をさらに発展させるべく努力したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

(1) 山本すい子、『藤篋冊子』源氏物語和歌注釈稿(下)、藤女子大学国文学雑誌、査読無、82号、2010、印刷中

(2) 久保田啓一、成島信遍年譜稿(十一)、広島大学大学院文学研究科論集、査読無、69巻、2009、1-13

(3) 久保田啓一、大田南畝編『ひとつもと

草』試注(七)―藤原覃「臥竜梅」一、鯉城往来、査読無、12号、2009、71―92

(4) 山本すい子、中井履軒『昔の旅』考、鯉城往来、査読無、12号、2009、15―26

(5) 山本すい子、『藤篋冊子』源氏物語和歌注积稿(中)、藤女子大学国文学雑誌、査読無、81号、2009、1―10

6) 久保田啓一、大田南畝の『日本風土記』享受、日本のことばと文化―日本と中国の日本文化研究の接点一、査読無、2009、98―110

(7) 山本すい子、〈鶉居〉をめぐって―秋成・蘭洲・履軒一、日本のことばと文化―日本と中国の日本文化研究の接点一、査読無、2009、84―97

(8) 久保田啓一、幕臣成島信遍と江戸文壇、国文学解釈と鑑賞、査読無、74巻3号、2009、6―13

(9) 山本すい子、『藤篋冊子』源氏物語和歌注积稿(上)、藤女子大学国文学雑誌、査読無、80号、2009、42―55

(10) 久保田啓一、成島信遍年譜稿(十)、広島大学大学院文学研究科論集、査読無、68巻、2008、1―15

(11) 久保田啓一、大田南畝編『ひとつと草』試注(六)―中神守節「積奠」一、鯉城往来、査読無、11号、2008、74―94

(12) 山本すい子、三宅石庵と菊、鯉城往来、査読無、11号、2008、19―28

(13) 久保田啓一、所謂「明和十五番狂歌合」をめぐって―一点取狂歌としての枠組一、中世近世和歌文芸論集、査読無、2008、315―329

(14) 山本すい子、中井整庵『とはすがたり』を読む―懐徳堂官許獲得運動の一側面一、藤女子大学国文学雑誌、査読無、79号、2008、1―11

(15) 久保田啓一、成島信遍年譜稿(九)、広島大学大学院文学研究科論集、査読無、67巻、2007、1―14

(16) 久保田啓一、大田南畝編『ひとつと草』試注(五)―藤原俣「七日」・信義「山門びらき」一、鯉城往来、査読無、10号、2007、50―70

〔学会発表〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 啓一 (KUBOTA KEIICHI)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80186452

(2) 研究分担者

山本 すい子 (YAMAMOTO SUIKO)

藤女子大学・文学部・准教授

研究者番号：20438344

(3) 連携研究者

()

研究者番号：